

恵那市

街か
よみがえる

地域住民を巻き込んだ
映画づくりで絆を結ぶ
えな“心の合併”プロジェクト



街おこしに携わってきた人びとに
スポットをあてるこの企画。
合併によって失われたアイデンティティを
映画作りによって取り戻そうとする、恵那市の活動に注目する。

市町村合併に立ち上がるのは 住民の心理的な壁

恵那市は二度の大合併を経て現在に至っている。一度目は昭和29（1954）年。恵那郡大井町、長島町、東野村、三郷村、武並村、笠置村、中野方村、飯地村の2町6村の合併によって恵那市が誕生。そして50年が過ぎた平成16（2004）年、いわゆる平成の大合併に促されるように、恵那郡南部（恵南）の4町1村（岩村町、山岡町、明智町、串原村、上矢作町）を加え、人口約5万6000人の新恵那市として出発することになる。

市町村合併は、行財政の効率化や地域のイメージアップと総合的な活力の強化など、スケールメリットによるプラス効果が期待できる反面、いくつかのデメリットも避けられない。行政の効率化を優先した合併の場合、文化的な繋がりが乏しく、住民の一体感を生むことが難しい。

新恵那市もその例外ではなかった。

合併から2年、地域の意識は ひとつになったのか？

合併前から、恵那市・恵南町村合併協議会では新市まちづくりの基本方針を策定して合併後の将来像を描いていた。そして、新市誕生とともに行政

や地域経済の担い手を中心となってきたまざまままちづくり活動を実行に移している。

しかし、合併から2年が過ぎたところ、当時商工観光課に所属していた可知昌洋さんがふとつぶやく。

「これでいいのだろうか？ 本場に地域の意識はひとつになるのだろうか？」

恵那市は、市全体のまちづくり構想を描く一方で、地域ごとの特性を生かした地域ブランド作りも推進した。その過程でひとつの危惧を抱いていたのだ。

「合併後、各地域住民が独自の企画でブランドづくりを進めていたのですが、それはいわば自分の家にきれいな垣根を作ることと同じではないかと思っただけですね。きれいな垣根があちこちにたくさんできても意味がありません。恵那全体がひとつにはならないといけないんです」

地域の絆、誇りをフィルムに残す ひとりの映画監督

そんななか、可知さんが参加した中部経済産業局主催のシンポジウムで出会ったのが、映画制作によるまちづくりの手法だった。

1本の映画がスクリーンにかかるまでには、数多くの人たちが参加する。映画制作によるまちづくりは、そのプ

ロセスに地元住民を巻き込んでその地を舞台にした物語を作りながら、地域の良さを再発見し、制作に参加するなかで地域のことを見つめ直すきっかけを作り出す。

実は、恵那市には過去、1本の映画がまちに活力を生んだ経験がある。今から53年前、恵那市を舞台に『青い山脈』という映画が撮影された。『青い山脈』は何度も映画化されている名作だが、恵那市でロケが行われたのは、昭和32（1957）年公開の松林宗恵監督版。雪村いづみと久保明が主演を務めている。

「当時はまちがとても盛り上がったそうです。ロケを見に行ったりして、騒然となったと聞いています」と今回の映画の広報担当を務める地元スタッフの柘植清成さん。

年配の住民の間では今でも語りぐさになっており、彼らは名画の舞台になったまちの住民であることに誇りをもっているという。

可知さんは、シンポジウムで知った東京の映画制作会社「ファイアーワークス」をアポなしで訪ねた。そこで出会ったのが、林弘樹監督だった。林監督は愛媛県西条市を舞台に、日本初の市町村合併記念事業として制作された『恋まち物語』をはじめ、神奈川県川崎市、東京都東大和市などで地域密着

型映画制作を成功させてきた実績をもつ第一人者だ。監督は言う。

「映画にはいろいろな人が関わります。制作現場での炊き出しやエキストラ出演など、さまざまな形で参加するなかで、地域の絆や誇りが生まれるんです」

林監督は、地域に眠っている有形無形の文化資産を見つけ出し、フィルムに焼き付けていくのだ。

その日初めて会った可知さんと林監督であったが、「具体的な話はなにもしなかったんですが、理屈では説明できないなにかを感じた」と林監督は回想する。この瞬間、恵那の映画の種が芽生えた。

市民レベルで立ち上がった 心の合併プロジェクト

林監督に恵那を舞台にした映画を作ってほしいと思いだめた可知さんは、のちに映画制作実行委員会の代表となる小坂潤治さんに相談を持ちかける。当時、商工会議所青年部の会長だった小坂さんは、広告制作などを手がけるグラフィックデザイン会社を経営している。クリエイティブな感性はもとより、可知さんが期待したのは行動力とネットワークだった。

「映画制作を行政レベルで進めるのではなく、市民のネットワークを通じて活動をあげたかったです。そのた



【旧恵那市】

JR中央本線、明知鉄道、中央自動車道、国道19号線が通る恵那市の中心地域。さらに恵那市を代表する景勝地である恵那峡や中山道大井宿など、観光の見どころも多い。

【岩村町】

かつての城下町。歴史ある町並みは国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定され、歴史的情緒が漂う。富田地区の田園風景は農村景観日本一にも選ばれている。

【上矢作町】

面積の90%を山林がしめる山間の緑豊かな町。河畔に面して建つ越沢コテージとコテージかわせみ、モンゴルの遊牧民の生活を体験できるモンゴル村も楽しい。

【山岡町】

陶土、寒天を主要産業に発展。特に、低カロリーで食物繊維を多く含む、健康食品としても注目される細寒天の生産量では、全国シェアの約8割を占めている。

【明智町】

養蚕・製糸業の成功で発展した地域で、その頃の建物を生かして「日本大正村」を開村した。平成23年には「大正百年祭」を開催し、町全体が祝賀ムード一色となる。

【串原村】

「へぼ」と呼ばれる蜂の子（クロスズメバチ）の巣の大きさを競う「全国へぼの巣コンテスト」で知られる。展望のいい「くしはら温泉ささゆりの湯」もおすすめ。



映画のコンセプトを生々の声で伝えるPRムービーも制作。上映会を重ねた



映画を広く知ってもらうために広報誌を制作。何度も編集会議が繰り返された



東京と地元のスタッフ、時には酒を酌み交わしながら親睦を深めた



地元スタッフに、映画作りを知ってもらおうと林監督自らが映画塾を開催

めには、広いネットワークをもった小
板さんが適任でした」と可知さん。
そして、平成17(2005)年12月、
小坂さんと林監督の出会いによって、
新恵那市を舞台にした映画制作が動
き出す。翌年1月、「えな」心の合併
プロジェクトが発足し、「えな映画実
行委員会」が正式に立ち上がった。

制作資金は一口1000円 住民の思いの結晶

映画制作のプロジェクトが始動した
のは4年前。しかし、実際にクランク
インするのは平成22(2010)年の8
月を待たねばならなかった。映画制作
には人手も欲しいが、何より資金が必
要である。プロジェクトは、クランクイ
ンを前に協賛金集めに奔走する。

昨年、約30分のPRムービーを制作
し、市内各地で上映会を催した。PR
ムービーにはプロジェクトの紹介や映
画の予告編、応援メッセージ集が収め
られている。応援メッセージに登場す
るのは、恵那市在住の人々。映画撮影だ
けではなく、準備のプロセスから住民
に参加してもらおうという意図である。
企画書のような紙のコミュニケーション
だけでは、映画制作の意図は伝わりに
くい。映像にすることによって、より明
確にプロジェクトの思いは届けられる。
協賛金は一口1000円から、個人

おにぎりを作るボランティア。夏祭り
のシーンに集まった何百人というエキ
ストラ。ロケの見物人。映画制作実行
委員会は、ロケを見物することも映画
制作への参加と位置づけ、地域の空気
を盛り上げている。

ロケは市内の各地で行われている
が、ロケばかりではなく、市内のほと
んどの場所で映画に関係することが行
われている。住民にとってはほとんど
が初めてのことであり、ある意味
「事件」といえる。そんな「事件」に参
加し目撃する共通体験は、きつといつ
までも心に刻まれて残るに違いない。
そして、代々その体験を語り継ぎなが
ら、少しずつ地域の意識はひとつにま



地域密着型映画制作の第一人者林弘樹監督を中心に撮影は快調にすすむ

団体、企業を問わず集められている。
大きなスポンサーが存在するわけでは
ない。プロジェクトの思いと、恵那市民
の思いが、映画制作の原資となってい
るのだ。

さらに、チャリティコンサート、チャ
リティゴルフ、バスツアーなども開催
し、PRを兼ねた資金集めも行われて
いる。プロジェクトメンバーはアピール
のためにいわむらレディースマラソン
に参加したこともあった。また、間伐
材を売って資金にもしているという。
「この映画は木でできています」と広
報の柘植さんは笑う。

映画という「事件」が 地域の意識をまとめる

そして、ついに平成22(2010)年
5月16日、岩村公民館で制作発表の日
を迎える。映画のタイトルは「ふるさ
とがえり」。映画づくりにはさまざま
な段階があるが、やはり大切なのは脚
本だろう。林監督とともに数々の地域
密着型映画を手がけてきた脚本家の
栗山宗大さんは事前に恵那市を訪れ、
地元住民とディスカッションを重ね
た。ふるさとという言葉で何を思いつ
くか? どんなできごとがあったのか?
住民の思い、経験から練り上げた物語
が「ふるさとがえり」である。映画の助
監督を辞め、栗里町に帰郷した男、相

とまっていかに違いない。53年前「青
い山脈」のロケを目撃した年配住民の
心を今でもときめかしているように。
制作実行委員代表の小坂さんはP
Rムービーでこう語っている。

「世代を超えたり、生きる世界が違
う人たちが集まって同じ思いを共有で
きることは、ふつうに生きていてな
かなかあることじゃない。いろんな人た
ちが集まって、心がつながっていくん
だな、ということを感じますね。心の
ふるさとづくりを非常に強く感じま
すし、それを僕らが体験して、子供た
ちに伝えていくということが大切なこ
とだし、それを映画で実現できればと
思っています」



主人公の少年時代も同時に進行。地元の子どもたちも重要な役をこなす



8月27日、関係者が一堂に会して映画制作スタッフの結団式が行われた

田勘治を主人公に、地域の消防団活動
を通じて地元での生活を見つめ直して
いくというストーリーだ。

キャストには主演の洪江譲二をはじめ、
佐藤仁美、村田雄浩、斉藤洋介、
笑福亭鶴光など、テレビでもおなじみ
の豪華な顔が並んでいる。正直なところ
予算は少ないが、「地域の人たちの心
の絆を作りたい」というプロジェクトの
思いに応じて出演を快諾してくれた。
また、主役の子供時代は、地元長島小
学校4年の熊崎雄大君が務めている。

クランクインは8月29日。実際の撮
影に入ると、映画づくりに参加する住
民は日に日に増えていく。炊き出しの

間伐材資金づくり

映画「ふるさとがえり」の製作資金の
ひとつとしてユニークな協賛プロジェクト
「恵那木こり基金」がある。現在、総面積
の約5分の2が人工林である恵那市では、
担い手の減少や山主不在などが問題視さ
れている。間伐などの手入れがなされず、
水源涵養機能が落ち、少しの雨で土砂崩
れとなりやすい状態の山が増えている。
そこで林業関係の仕事するスタッフの発
案により、間伐を行い、切った木を売って
その売り上げを映画資金にしようという
プロジェクトがスタート。



撮影、間伐作業。映
画の資金にもなる
ながら、間伐作業、
土地のためにもなる
少ない人数で行う



子どもたちをメインに行われた撮影風景

恵那市

平均標高300m、丘陵地に広がる恵那市は、江戸、明治、大正、昭和、そして平成が入り交じった不思議な魅力を持つ街だ。市の中心には中央自動車道と国道19号線、そして、江戸時代の幹線中山道が平行して走る。それが象徴するように、岩村町の城下町や、明智町の大正村など、いろいろな年代の面影を残す町が点在する。自然の豊かさも魅力。木曾川、矢作川、庄内川へ注ぐ川が無数に流れる。中心街からすぐ、自然が作り出す美を体感できる恵那峡も近い。

1. 9月下旬にJR恵那駅前で開催される「みのじのみのり祭」。約200メートルに渡る炭火で焼き松茸を味わう 2. 「日本の棚田百選」に認定され、石積み美しい棚田が広がる田園風景を見ることができる「坂折棚田」 3. 恵那駅から明智駅までの約25kmを結ぶ「明知鉄道」。どこか懐かしい風景が続く 4. 恵那市と中津川市を流れる木曾川中流の渓谷「恵那峡」

